

澄[×]光法親王〔「奥羽観蹟聞老志」と同じ誤り〕

夫木集 しひてとふ人はありとも恋すてふ名取の里をそことしらすな

夫木集里部 なとりの里

陸奥寄里恋 前大僧正[×]経覚』

3. 「大日本地名辞書」第7巻（吉田東伍）

『名取郷

強て問ふ人はありとも恋すてふ名取の里をそこと知らすな〔夫木集・歌枕〕

隆[×]覚』

資料 国歌大観（松下大三郎編）

日本人名大事典（平凡社編）

95. 「貞樹院」と「鰻」

問 伊達吉村が、青根湯治の土産に貞樹院に鰻を贈ったと書いたものを見ました。貞樹院とはどんな人か、また鰻とはどんな魚なのですか。

答 伊達吉村は、青根温泉をこよなく愛し、浩然の気を養いがてら屢々保養に赴いていました。青根は、蔵王山麓、標高500mの世俗を離れた閑寂な温泉地で、一般の温泉宿とは別に、青根御殿と称する伊達家専用の旅館が設けてありました。

「貞樹院」とは、伊達吉村の実母の号であります。この女性は、白石片倉家の第3世小十郎景長の女で、名は松子、宮床の伊達肥前宗房に嫁した人です。その宗房と松子との間に長子として延宝8年〔1680〕に生れたのが吉村であります。吉村は、元禄16年〔1703〕伊達本家第5代の当主となり、時の8代将軍徳川吉宗も高く評価する程の治績を挙げ、中興の英主と称せられる名君であります。吉村は孝心厚く、実母「貞樹院」への心遣いを終生怠ることがなかったのです。

次に「鰻」は、「和名類聚抄」(源順)巻19に『鰻〔い〕 崔禹錫食經云鰻音夷和名伊師布之 性状沈在石間者也』とあり、「伊師布之」即ち「いしぶし」とあります。「大言海」(大槻文彦)に『いしぶし(杜父魚)〔石伏ノ義、常ニ、水底、沙上ニ居リテ、浮游セズ、福州府志ニ石伏魚トアル、是レナリト云フ〕淡水ノ魚。今かはかぢかと云フ。』「古語大辞典」(中田祝夫等)に『いしぶし〔石伏・石斑魚〕〔名〕淡水魚。現在の鰻(かじか)。石の間に沈んでいるので、この名がある』「物類称呼」(越谷〔こしがや〕吾山)にも『杜父魚、かじか』。また「広辞苑」第1版にも『いしぶし〔石伏〕〔方言〕①ヨシノボリのこと②ウキゴリのこと③かじかのこと』とあり、この場合は「かじか」のこ

とであります。「かじか」は清流に棲む淡水魚で、青根溪流産の「かじか」は特に美味で、吉村は、母貞樹院への青根土産の一つとして、その都度忘れることがなかったもののようです。

注(1) P. 465 の注(6)参照。

注(2) 柴田郡川崎町南西縁、蔵王山麓の温泉。国立公園蔵王連峰の花房山〔標高 819 m〕の東麓、標高 500 m 前後の位置にある。背後には六方山、川音岳、倉石山などの蔵王連峰の樹海が広がる。前方には柴田・刈田・名取の平野を見晴らし、更に遥か牡鹿・松島まで展望できる。温泉は天文年間〔てんぶん。1532～1555〕に発見された大湯、病人が弥陀〔みだ〕の称号を唱えながら入湯すると全快するという名号湯〔みょうごうゆ〕、江戸時代に発見され、伊達家の当主や家族が保養のために訪れた新湯に 3 分給湯される 6 源泉があり、10 軒の温泉旅館は、この 6 源泉を混合利用している。アルカリ性単純温泉で、湯温は 43 ° から 56 ° C。効能は胃腸病、神経痛、リウマチなどである。観光有料道路エコーラインの開通以来、来湯者が増加した。最近では、東北自動車道、東北新幹線の完成とともに、一層急増し、旅館の大型ホテル化、デラックス化が進んでいる。

「柴田郡誌」（柴田郡教育会）に、

『青根は

享保三年〔1718〕から寛政六年〔1794〕に至る^{×××××}八十一年間〔年数誤算〕伊達国主並に夫人等枉駕すること十回に及び一門一家の輩に至りて殆ど十三家の多きに上る。故に別に殿閣を造営して青根御殿と称し以て国主の旅館となしたのである。

山時雨 仙台中将吉村朝臣

名こそなくはれぬみ山のむらしぐれ

あしたの雲のあともめなく

何くれとことわさしげき世のうさも

忘れてあかぬ山ののどけさ

くみてなほあふぐも高しこの山の

るりの光のきよきつほゆは

やまずみの馴れてぞ今は松の風

たきのひびきも夜半のともなる

はなふさの山のなのみの冬さびて

ただ白雪ぞはるのおもかけ』

注(3) 通称小十郎。刈田郡白石の片倉家〔郷土史家といわれる人の中で「白石城主」^{××}としているのをかなり見受ける。「白石城」は一国一城の規制を外れた特認の城であるが、そこに常住する片倉氏即城主ではない。徳川時代の「城主」とは、大名家の格付公称で、国主・准国主に次ぐ第 3 等級に指定されたものをいう。「城主」については P. 61 の注(4)参照。大名でない

片倉氏に、濫りに^{××××}白石城主などと冠することは許し難い誤りである。〕第2代重長に実子がなかったため、外孫三之助〔松前市正安広の子〕を養嗣とし、片倉家第3代当主とした。萬治2年〔1659〕江戸小石川堀修理の事〔伊達家第3代綱宗隠居の原因の一つとなった〕を司り、幕府から白銀100枚、時服10領を賜わった。寛文7年〔1667〕伊達家第4代綱村が元服する時、景長が加冠した。ついで奉行となり、天和元年〔1681〕5月24日歿、享年52。刈田郡蔵本村愛宕山下に葬る。その女松子が、御一門宮床伊達肥前宗房の夫人となり、伊達本家第5代吉村を生んだ。

「片倉家系図」 景綱—重長—景長—村長—村休—村定—村廉—村典—景貞—宗景—邦憲—景範—景光。

代々通称小十郎。

注(4) P. 174 の注(4)参照。

注(5) P. 118 の注(1)参照。

注(6) P. 110 の注(4)参照。

注(7) 語学書。5巻。越谷吾山著。安永4年〔1775〕序。天地・人倫・草木・気形・器用・衣食・言語の7部門に分け、日本全国の方言を収集し、古書を引いて考証を付した辞書。

資料 仙台市史（明治41年版）

和名類聚抄（源順）

古語大辞典（中田祝夫等）

物類称呼（越谷吾山）

大言海（大槻文彦）

96. 「群山」の読み

問 短歌の同人誌「群山」の題号の読みは「むれやま」でしょうか。

答 「群山」は、東北アララギ会の短歌誌として、仙台市に発行所を置き、昭和21年7月20日創刊、以来月刊で今日まで継続発行されているもので、その題号「群山」の正しい読み方は、「むれやま」ではなく「むらやま」であります。「群山」発刊の言葉が、創刊号の前扉に次のように記されています。

『短歌に対する吾々の愛着はすでに本態的であり、生活の中に深く根ざしてゐる。如何なる時代、環境にあってもその真実純粋なる詠嘆は、人間本然の叫びとして蔽はれることなく表白された。戦ひの